

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：37404

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12940

研究課題名（和文）明治・大正期の投書文化と小説作法言説の研究

研究課題名（英文）A Study of the Novel Writing Culture and Novel Writing Discourse in the Meiji and Taisho Periods

研究代表者

山本 歩 (Yamamoto, Ayumu)

尚絅大学・現代文化学部・講師

研究者番号：90755092

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000 円

研究成果の概要（和文）：明治後期から大正前期までの小説作法言説の主要なものとして、新潮社の日本文学学院と、博文館の雑誌『文章世界』、及びその関連出版物が挙げられる。一早く小説作法を商品化した同社の動向からは、文学に関する言説の展開を窺うことができると同時に、その過程で生まれたタームや分類がリテラシーに影響を与えた可能性が考えられる。創造性研究の知見を参照して意義付けると、それらを評価する際は、試みさせようとしているものを測る必要もある。またそれは具体的な技術伝達ばかりでなく、書けている状態を伝える言説である場合もある。『文章世界』上の田山花袋を中心とした小説作法言説もこの観点から言えば一定の価値がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は小説作法言説の調査によって、その発生のコンテキスト・具体的内容・意義・投書文化との相関を明らかにするものである。従来の近代文学史においては看過されがちであった資料を活用し、小説の振興を支えた言説とその受容を明らかにする。当該期間においては日本文学学院をはじめとする明治～大正期の言説から、自然主義文学に関する言説が再編・応用されていく様子を窺うと共に、小川未明などの事例から、従来の文学史がカバーできなかった青少年層への影響の有様を明らかにできた。また従来は評価しづらかった小説作法言説を、創作に関する試行錯誤や、書けている状態を伝えるものとして意義付けた。

研究成果の概要（英文）：The main "novel writing discourses" from the late Meiji to the early Taisho period include the Nihon Bunsho Gakuin of Shinchosha and the Hakubunkan magazine "Bunsho Sekai" and related publications. The development of Shinchosha, which was the first to commercialize "novel writing" provides a glimpse into the development of literary discourse, and at the same time, the terms and categories that emerged from this process may have influenced the literacy of the novel. When we evaluate the significance of "novel writing discourses" with reference to the findings of creativity studies, it is necessary to measure what they are trying to make us attempt. It can also be a discourse that conveys the state of "being able to write" as well as instruction in specific techniques. From this perspective, the "novel writing discourse" centering on Tayama Hanabukuro in "Bunsho Sekai" has a certain value.

研究分野：日本近代文学

キーワード：小説作法 日本近代文学 日本文学学院 文章世界 文範（文例集） 新潮社

1. 研究開始当初の背景

本研究は明治・大正期の小説作法言説についての研究である。本研究において小説作法言説と呼称するのは、従来、小説創作を促すものとして意義づけられてきた評論(坪内逍遙『小説神髓』等)の他、初学者向け刊行物(田山花袋『小説作法』や徳田秋声『小説の作り方』等)並びに講義録(日本文学学院における「小説作法」等)、雑誌記事、投書・懸賞小説に対する選評である。とりわけ刊行物や講義録には、これまで雑本・雑書として軽視されてきたものも多い。その再評価は、本研究の前半期に取り組むべき基礎作業である。

本研究の学術的な背景として、近代日本において若年層に文学教育やアマチュアの創作を奨励した投書雑誌の存在、およびその研究が挙げられる。投書・懸賞文化とその媒体については、紅野(2003)をはじめ研究の蓄積がある。また本研究が注目したい日本文学学院(新潮社)の講義録・機関誌については、宮崎(1999等)の基礎的な調査・研究が存在する。しかし、田山花袋『小説作法』をはじめとし、多くの小説作法言説の内容や価値について、研究開始時点ではほとんど言及されておらず、基礎的な調査や解釈が必要であった。単行本や叢書、講義録の形で刊行された小説作法言説には現在入手困難なものも多く、今後ますます資料の散逸が予想される。そのような経緯から、本研究に着手する必要性に思い至った。

研究開始時点で明治期の小説作法言説の調査は開始しており、主要な成果として、落合浪雄『着想描写 小説著作法』(1904)が海外の小説作法書『HOW TO WRITE A NOVEL: A Practical Guide to the Art of Fiction』の翻訳であることを突き止め、その訳出の在り方を研究した。

2. 研究の目的

本研究は、一部を除き未だ収集・分析の進んでいない個別具体的な小説作法言説を取り扱った上で、それらと投書文化の影響関係を見るものである。文学趣味やアマチュア創作の背景と関わるものとして小説作法言説を重視し、技術およびコンセンサスの形成といった影響力、また奨励(あるいは煽動)のあり方を明らかにしたい。それは各々の媒体で、誰が/どのような作法が/如何なる外的な現象と結びつくことで、小説の振興を支えていったのかという、文学受容史を浮かび上がらせるだろう。この目的を踏まえ、本研究の根幹的な「問い」としては、小説作法言説として具体的にどのようなものが存在し、それらに特徴的な主張・影響力はどのようなもので、またそれらは若年層や文学を取り巻くどのような外的環境と結びついていたか、の3点が挙げられる。

3. 研究の方法

本研究で行った具体的な作業は、小説作法言説の調査・解釈・位置づけの確認、及び関連する媒体における投書小説との比較検討である。文献資料は、博文館や新潮社(日本文学学院)関連の出版物など、明治・大正期のものを中心に収集した。その際、各大学図書館、日本近代文学館、国立国会図書館、および株式会社新潮社の資料室の所蔵資料を活用した。特に昭和女子大学図書館(日本文学学院『新文壇』第1巻など)、新潮社資料室(日本文学学院関係資料)の蔵書は貴重な資料であった。

また、小説作法言説の意義を検討するため、認知心理学における創造性(creativity)研究を参照した。小説作法言説が社会や読者にどのような利益をもたらすのかという評価は、読者がプロ作家になれるかどうか、名作を書けるかどうかという観点からなされるべきではない。後述のように、創作のための試行錯誤それ自体を創造性とみなす立場をとれば“何を試みさせようとしているか”や“書けるという状態をどのように伝えているか”という点に注目すべきである。

4. 研究成果

本研究の重要な作業として、文献資料の収集・調査があったが、期間中、新型コロナウイルス(COVID-19)の世界的流行および研究者の罹患により、その進行に遅れが生じた(移動の制限、近隣大学のマイクロフィルム閲覧機器の修理遅滞。そんな中、リモート学会・研究会の開催や、国立国会図書館デジタルコレクションの拡充などが助けとなった。

本研究で最も注目したのは明治末期から大正前半期にかけての、日本文学学院周辺の言説である。新潮社はいちはやく小説作法に目を付け、同学院の講義や機関誌『新文壇』を通じて、小説作法を説くと共に、自社の刊行物を副読本と位置付けて販売していった。さらにポスト自然主義文学の風潮のもとで、小栗風葉名義での「小説作法」講義を掲載しつつ「描写」等の自然主義的な語彙を織り交ぜながらも、自然主義に馴染めぬ青年読者にアプローチしていった。やがて小説作法言説を資源として、個別の技法を商品化する、文章全般の技法に置き換えるなど商業的な展開を行った。『会話文範』(1911)や『人物描写法』(1912)、『新描写辞典』(1915)等は、その特殊性を代表している。文学に関する言説が如何に咀嚼され、膾炙されていったのかの一端を窺うことができると同時に、その過程で価値づけられていく「神経描写」「感覚描写」

といったタームや分類項が、小説のリテラシーに影響を与えた可能性が考えられる。また、日本文学学院の周辺人物＝金子薫園・小栗風葉・真山青果・小川未明・相馬御風は、青年読者層に影響を与えたネットワークとして注目に値する。

日本文学学院については、雑誌論文 2 本、研究ノート 1 本を発表した他、文範研究会にて口頭発表を行っており、その成果は今後論文化される予定である。

小説作法言説の意義づけのため、創造性(creativity)研究の知見も参照した。小説作法は具体的な創作物を生み出すというよりは、創作のための試行錯誤である「mini-c creativity」(Kaufman & Beghetto,2009)に関わるものである。すなわち小説作法言説を評価する際は、何を試みさせようとしているのかも測る必要がある。またそれは具体的で再現性の明瞭な技術伝達ばかりでなく、書けている状態(Achievement)を伝える言説(生田,2014 等)である場合もある。造語や応用によって整理された日本文学学院系の小説作法言説に比べ、博文館『文章世界』上の田山花袋を中心とした小説作法言説は、観念的で精神論に過ぎないように見える指導も多い。だが上述の観点、すなわち書けている状態(観察の際や記憶力の活用など)を伝えているものだと解釈すれば、一定の価値がある。このような観点からの雑誌論文 1 本を発表した。『文章世界』の指導の評価、及び投書作品との相関関係について、引き続き論文化していく予定である。

参考文献

- ・紅野謙介『投機としての文学 活字・懸賞・メディア』(新曜社, 2003)
- ・宮崎睦之「独習と添削と佐藤義亮の講義録」(『日本近代文学』第 60 集, 日本近代文学会, 1999)
- ・J.Kaufman & R.Beghetto, Beyond Big and Little: The Four C Model of Creativity, Review of General Psychology, Vol.13, 2009
- ・生田久美子「「わざ」の伝承は何を目指すのか Task か Achievement か」(生田久美子・北村勝朗編『わざ言語 感覚の共有を通しての「学び」へ』(慶應義塾大学出版会、平成二六年四月)所収)一〇～一五頁

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 山本歩	4. 巻 48
2. 論文標題 『文章世界』の指導における「頭の修練」 小説作法 は何を伝えるか	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 近代文学論集	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本歩	4. 巻 11
2. 論文標題 研究ノート：土師清二＝赤松静太の文章修行 日本文学学院の指導と院生の熟達	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 尚綱語文	6. 最初と最後の頁 14-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山本歩	4. 巻 54
2. 論文標題 『新文壇』上の小川未明 日本文学学院の研究として	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 尚綱大学研究紀要 人文・社会科学編	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山本歩	4. 巻 13
2. 論文標題 日本文学学院『新文壇』記事一覧	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 尚綱語文	6. 最初と最後の頁 34-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山本歩
2. 発表標題 すべてが文範になる 日本文学学院（新潮社）の販売戦略
3. 学会等名 文範研究会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

・山本歩「『一兵卒』」（17-18頁）（解説）：五十嵐伸治・伊狩 弘・千葉正昭（編）『田山花袋事物事典』,2024年,鼎書房,総頁数196

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------